

寺田寅彦

コーヒー哲学序説



コーヒー哲学序説

八九歳のころ医者^イの命令で始めて牛乳というものを飲
まされた。当時まだ牛乳は少なくとも大衆一般の嗜好品^{しこうひん}
でもなく、常用栄養品でもなく、主として病弱な人間の
薬用品であったように見える。そうして、牛乳やいわゆ
るソップがどうにも臭くって飲めず、飲めばきつと嘔吐^{おうと}
したり下痢したりするという古風な趣味の人の多かつた
ころであった。もつともそのころでもモダンなハイカ
ラな人もたくさんあって、たとえば当時通学していた番

町小学校の同級生の中には昼の弁当としてパンとバタを常用していた小公子もあつた。そのバタというものの名前さえも知らず、きれいな切り子ガラスの小さな壺にはいった妙な黄色い蠟ろうのようなものを、象牙の耳かきのようなものでしゃくい出してパンになすりつけて食つているのを、隣席からさもしい好奇の目を見張っていたくらいである。その一方ではまた、自分の田舎では人間の食うものと思われていない蝗いなごの佃煮をうまそうに食つている江戸っ子の児童もあつて、これにもまたちがつた意味での驚異の目を見張つたのであつた。

始めて飲んだ牛乳はやはり飲みにくい「おくすり」であつたらしい。それを飲みやすくするために医者はこれに少量のコーヒーを配剤することを忘れなかつた。粉にしたコーヒーをさらし木綿もめんの小袋にほんのひとつまみちよつぴり入れたのを熱い牛乳の中に浸して、漢方の風邪薬のように振り出し絞り出すのである。とにかくこの生まれて始めて味わつたコーヒーの香味はすっかり田舎育ちの少年の私を心酔どうけいさせてしまった。すべてのエキゾチックなものに憧憬どうけいをもっていた子供心に、この南洋的西洋的な香気は未知の極楽郷から遠洋を渡つて来た一

脈の薰風くんぷうのように感ぜられたものようである。その後まもなく郷里の田舎へ移り住んでからも毎日一合の牛乳は欠かさず飲んでいたが、東京で味わったようなコーヒーの香味はもう味われなかつたらしい。コーヒー糖と称して角砂糖の内にひとつまみの粉末を封入したものが一般に愛用された時代であったが往々それはもう薬臭くかび臭い異様の物質に変質してしまっていた。

高等学校時代にも牛乳はふだん飲んでいたがコーヒーのようなぜいたく品は用いなかかった。そうして牛乳に入れるための砂糖の壺から随時に歯みがきブラシの柄など

でしゃくい出しては生の砂糖をなめて菓子に代用にしたものである。試験前などには別して砂糖の消費が多かったようである。月日がめぐって三十二歳の春ドイツに留学するまでの間におけるコーヒーと自分との交渉についてはほとんどこれという事項は記憶に残っていないようである。

ベルリンの下宿はノーレンドルフの辻に近いガイスベルク街にあって、年老いた主婦は陸軍将官の未亡人であった。ひどくいばったばあさんであったがコーヒーはよいコーヒーをのませてくれた。ここの二階で毎朝寝巻の

ままで窓前にそびゆるガスアンシユタルトの円塔をながめながら婢ひのヘルミーナの持つて来る熱いコーヒーを飲み香ばしいシユニツペルをかじった。一般にベルリンのコーヒーとパンは周知のごとくうまいものである。九時十時あるいは十一時から始まる大学の講義を聞きにウンテル・デン・リンデン近くまで電車で出かける。昼前の講義が終わって近所で食事をするのであるが、朝食が少量で昼飯がおそく、またドイツ人のように昼前の「おやつ」をしないわれらにはかなり空腹であるところへ相当多量な昼食をしたあとは必然の結果として重い眠けが襲

来する。四時から再び始まる講義までの二三時間を下宿に帰ろうとすれば電車で空費する時間が大部分になるので、ほど近いいろいろの美術館をたんねんに見物したり、旧ベルリンの古めかしい街区のことさらに陋巷ろうこうを求めて彷徨ほうこうしたり、ティアガルテンの木立ちを縫うてみたり、またフリードリヒ街や、ライプチヒ街のシヨウウインドウをのぞき込んで「ベルリンのギンブラ」をするほかはなかった。それでもつぶしきれない時間をカフェーやコンデイトライの大理石のテーブルの前に過ごし、新聞でも見ながら「ミット」や「オーネ」のコーヒーをちび

ちびなめながら淡い郷愁を瞞まん着ちやくするのが常習になつてしまつた。

ベルリンの冬はそれほど寒いとは思わなかつたが暗くて物うくて、そうして不思議な重苦しい眠けが濃い霧のように全市を封じ込めているように思われた。それが無意識な軽微の慢性的郷愁と混合して一種特別な眠けとなつて額をおさえつけるのであつた。この眠けを追い払うためには実際この一杯のコーヒーが自分にはむしろはなはだ必要であつたのである。三時か四時ごろのカフェーにはまだ吸血鬼の粉黛ふんたいの香もなく森閑としてどうかする

とねずみが出るくらいであつた。コンデイトライには家庭的な婦人の客が大多数でほがらかにぎやかなソプラノやアルトのさえずりが聞かれた。

国々を旅行する間にもこの習慣を持って歩いた。スカンディナヴィアの田舎には恐ろしくがんにようで分厚ぶあつでたたきつけても割れそうもないコーヒー茶わんにしばしば出会つた。そうして茶わんの縁の厚みでコーヒーの味覚に差違を感じるといふ興味ある事実を体験した。ロシア人の発音するコーファイが日本流によく似ている事を知つた。昔のペテルブルグ一流のカフェーの菓子はなかな

かにぜいたくでうまいものであった。こんな事からもこの国の社会層の深さが計られるような気がした。自分の出会った限りのロンドンのコーヒーは多くはまずかつた。大概の場合はABCやライオンの民衆的なる紅茶で我慢するほかはなかった。英国人が常識的健全なのは紅茶ばかりのんでそうして原始的なるビフステキを食うせいでと論ずる人もあるが、実際プロイセンあたりのぴりぴりした神経は事によるとうまいコーヒーの産物かもしれない。パリの朝食のコーヒーとあの棍棒こんぼうを輪切りにしたパンは周知の美味である。ギャルソンのステファンが、

「ヴオアラ・ムシウ」と言つて小卓にのせて行く朝食は一日じゅうの大なる楽しみであつたことを思い出す。マデレーヌの近くの一流のカフェーで飲んだコーヒーのしずくが凝結して茶わんと皿とを吸い着けてしまつて、いっしよに持ち上げられたのに驚いた記憶もある。

西洋から帰つてからは、日曜に銀座の風月ふうげつへよくコーヒーを飲みに出かけた。当時ほかにコーヒーらしいコーヒーを飲ませてくれる家を知らなかつたのである。店によるとコーヒーだか紅茶だかよほどよく考えてみないとわからない味のものを飲まされ、また時には汁粉の味の

するものを飲まされる事もあった。風月ではドイツ人のピアノストS氏とセリストW氏との不可分な一対がよく同じ時刻に来合わせていた。二人もやはりここ一杯のコーヒーの中にベルリンないしライプチヒの夢を味わっているらしく思われた。そのころの給仕人は和服に角帯姿であったが、震災後向かい側に引越してからそれがタキシードか何かになると同時にどういふものか自分にはここの敷居が高くなってしまった、一方ではまたSとかFとかKとかいふわれわれ向きの喫茶店ができたので自然にそっちへ足が向いた。

自分はコーヒーに限らずあらゆる食味に対してもいわゆる「通」というものには一つも持ち合わせがない。しかしこれらの店のおののコーヒーの味に皆区別があることだけは自然にわかる。クリームの香味にも店によって著しい相違があつて、これがなかなかたいせつな味覚的要素であることもいくらかはわかるようである。コーヒーの出し方はたしかに一つの芸術である。

しかし自分がコーヒーを飲むのは、どうもコーヒーを飲むためにコーヒーを飲むのではないように思われる。宅うちの台所で骨を折ってせいぜいうまく出したコーヒー

を、引き散らかした居間の書卓の上で味わうのではどうも何か物足りなくて、コーヒーを飲んだ気になりかねる。やはり人造でもマーブルか、乳色ガラスのテーブルの上に銀器が光っていて、一輪のカーネーションでもにおっていて、そうしてビュツフェにも銀とガラスが星空のよういきらめき、夏なら電扇が頭上にうなり、冬ならストーヴがほのかにほてっていないければ正常のコーヒーの味は出ないものらしい。コーヒーの味はコーヒーによって呼び出される幻想曲の味であって、それを呼び出すためにはやはり適当な伴奏もしくは前奏が必要であるらし

い。銀とクリスタルガラスとの閃光せんこうのアルペジオは確かにそういう管弦楽の一部員の役目をつとめるものであるう。

研究している仕事が行き詰まってしまつてどうにもならないような時に、前記の意味でのコーヒーを飲む。コーヒー茶わんの縁がまさにくちびると相触れようとする瞬間にぱつと頭の中に一道の光が流れ込むような気がすると同時に、やすやすと解決の手掛かりを思いつくことがしばしばあるようである。

こういう現象はもしやコーヒー中毒の症状ではないか

と思つてみたことがある。しかし中毒であれば、飲まない時の精神機能が著しく減退して、飲んだ時だけようやく正常に復するのであるが、現在の場合はそのほどのことではないらしい。やはりこの興奮剤の正当な作用でありきき目であるに相違ない。

コーヒーが興奮剤であるとは知つてはいたがほんとうにその意味を体験したことはただ一度ある。病気のために一年以上全くコーヒーを口にしないでいて、そうしてある秋の日の午後久しぶりで銀座へ行つてそのただ一杯を味わつた。そうしてぶらぶら歩いて日比谷へんまで来

るとなんだかそのへんの様子が平時とはちがうような気がした。公園の木立ちも行きかう電車もすべての常住的なもの、ひどく美しく明るく愉快なもののように思われ、歩いている人間がみんな頼もしく見え、要するにこの世の中全体がすべて祝福と希望に満ち輝いているように思われた。気がついてみると両方の手のひらにあぶら汗のようなものがいっぱい、にじんでいた。なるほどこれは恐ろしい毒薬であると感心もし、また人間というものが実にわずかな薬物によって勝手に支配されるあわれな存在であるとも思ったことである。

スポーツの好きな人がスポーツを見ているとやはり同様な興奮状態に入るものらしい。宗教に熱中した人がこれと似よった恍惚状態こうこうを経験することもあるのではないか。これが何々術と称する心理的療法などに利用されるのではないかと思われる。

酒やコーヒーのようなものはいわゆる禁欲主義者などの目から見れば真に有害無益の長物かもしれぬ。しかし、芸術でも哲学でも宗教でも実はこれらの物質とよく似た効果を人間の肉体と精神に及ぼすもののように見える。禁欲主義者自身の中でさえその禁欲主義哲学に陶醉

の結果年の若いに自殺したローマの詩人哲学者もあるくらいである。映画や小説の芸術に酔うて盗賊や放火をする少年もあれば、外来哲学思想に酩酊めいていして世を騒がせ生命を捨てるものも少なくない。宗教類似の信仰に夢中になつて家族を泣かせるおやじもあれば、あるいは干戈かんかを動かして悔いない王者もあつたようである。

芸術でも哲学でも宗教でも、それが人間の人間としての顕在的実践的な活動の原動力としてはたらくときにはじめて現実的の意義があり価値があるのではないかと思うが、そういう意味から言えば自分にとってはマーブル

の卓上におかれた一杯のコーヒーは自分のための哲学であり宗教であり芸術であると言つてもいいかもしれない。これによつて自分の本然の仕事がいくぶんでも能率を上げることができれば、少なくとも自身にとつては下手な芸術や半熟の哲学や生ぬるい宗教よりもプラグマティックなものである。ただあまりに安価で外聞の悪い意地のきたない原動力ではないかと言われればそのとおりである。しかしこういうものもあつてもいいかもしれないというまでなのである。

宗教は往々人を酩酊めいていさせ官能と理性を麻痺まひさせる点で

酒に似ている。そうして、コーヒーの効果は官能を鋭敏にし洞察と認識を透明にする点でいくらか哲学に似ているとも考えられる。酒や宗教で人を殺すものは多いがコーヒーや哲学に酔うて犯罪をあえてするものはまれである。前者は信仰的主観的であるが、後者は懐疑的客観的だからかもしれない。

芸術という料理の美味も時に人を酔わす、その酔わせ成分には前記の酒もあり、ニコチン、アトロピン、コカイン、モルフィンいろいろのものがあるようである。この成分によって芸術の分類ができるかもしれない。コ

カイン芸術やモルフイン文学があまりに多きを悲しむ次第である。

コーヒー漫筆がついついコーヒー哲学序説のようなものになってしまった。これも今しがた飲んだ一杯のコーヒーの酔いの効果であるかもしれぬ。

(昭和八年二月、経済往来)

日本文学電子図書館

コーヒー哲学序説

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第四卷
岩波文庫、岩波書店

昭和41年7月10日 第24刷発行



日本文学電子図書館